

## 第2回 蘇東坡は自身の生涯を語り始めた

こ たび きぜつ へいぜい かん  
—— 茲の遊の奇絶なること平生に冠たり

2016年6月28日（火）。

梅雨の割には雨の日が少なく、特にこの前日は晴れて暑く、5月にリニューアルされたばかりの小田原城に行ってみたところ、花菖蒲の時季が終わった堀のあたりで蟬の音が聞かれ、アイスクリームの自動販売機は売り切れになっていた。しかし、夜に雨となり、朝は涼しかった。

それでも雨は昼前にあがり、自転車ですーぱーに行つてその帰りに海辺をまわると、波はほとんどなかった。それで今日はイノ君がくると思った。

前回から2週間が過ぎ、法螺話の一件が気になっていた。同じ施設に勤務していても、私はデイでイノ君は入所なので顔を合わせることは少なく、様子を聞くチャンスがなかった。

ちょうど午後3時に窓を見ると、イノ君が外に立っていてトントンとたたいた。いつも通りに、私はコーヒーを淹れ始め、玄関から入ってきたイノ君は座椅子にすわった。

ちやぶ台にコーヒーを置きつつ、とりあえず参議院選でも話題にしようかと思っっていると、

「この間は、ついあんなことをいってしまったんだけど、あれからまじめに考えてみたら、なかなかできるもんじゃないって、だんだんとわかってきたんだ。それで、なんかちよつと……」

イノ君は自分から切り出して、コーヒーを手にした。しかし、口へとは運ばずにそのまま黙ってしまった。

「あんなことって、なんですか？」

わざと空つとぼけてみせると、

「あれって、あれなんだけどさ、どうしようかって……。あれっ、叔父さん、忘れてなんかいたりしないよね」

イノ君のとがめるような声に、急いで、

「あれだったら、もちろん忘れていません。でも、もうあれは、あれでいいのではないかと思っています」

「そうはいかないよ。叔父さんとの約束だもの。楽しみにしているっていったじゃん」

「そうですね。でもあれはもうなしということではないのでしょうか」  
法螺話はさりげなく終止符を打つのがよい。トバー君なる人物の実在性は限りなく疑わしく、これ以上追求するのは意地悪というものだろう。

「昔、社長にくつついて行ったときのことを思い出してみたんだけど、社長は氣楽にやっているように見えて、実はちゃんとかかなり下調べをして、工夫して上手に聞き出していたんだよなあ。その真似がボクにできるのかなあって考えたら、なんかかなりビビっちゃったんだ」

「そんなに真剣に考えなくて、テキストでよかったですよ」

「ボクは馬鹿だからテキストっていうのができないんだって。蘇東坡そとうぼっていうのは超有名人なのに、ボクはなんにも知らないんだ。それでもって『我が生涯』を聞き出すなんて絶対に無理なんだよなあ」

「だからその話はおしまいということ。チャチなホームページは自力で2桁に乗せますから。ほら、そのコーヒーを飲んで。なんか甘いもんでも出しましょうか？」

イノ君はやつとひと口すすって、

「ボクはこだわるところはこだわらんで、ちゃんと約束を果たさなければって、いろいろ考えたんだ。やっぱり蘇東坡について予備知識がゼロっていうのはどうにもならないよね。それで、少しは調べっかかって思ったんだ。そもそも蘇東坡ってというのはどんな人なのか、叔父さんだったらどういうふうに説明する？」

「私だって知識は、視力とどっこいどっこいで、0・1もあるかどうかですけど、

蘇東坡がどういう人かっていったら、イノ君がいまもいったように、中国の歴史では超有名人ってことでしょうね。しよかつこうめい諸葛孔明のような三国志の英雄たちとは違い、

戦争とは無縁の文化人です。政治家でもありませんが、詩や文章がとにかく上手で、蘇東坡が生きた宋そうの時代で一番の名手だったのは間違いないと思います。宋というのは日本では平安、鎌倉時代のころです。書や画も得意で、何でも一流だった万能の天才としては中国でも第一番かも知れません。そんな人でも、何度かの挫折を経験し、黄州こうしゅうに流されたり、晩年には遙か南の海南島かいなんとうに流されたりもしました。困難に遭遇するごとに人間性が深まって、とくに晩年の詩はしみじみとした味わいがあるって、いぶし銀のような深い輝きを湛えるとよくいわれます。ざっとこんなところでしょいか」

「さっすがあ。すらすら、よくいえました。感心、感心！ パチパチパチ」

「イノ君にほめてもらえてめっちゃうれしいかもね」

「ボクもね、まるつきり泥縄だけど、この前の夜勤明けの帰りに、図書館に行っ

て調べようとしたんだ」

「へーえ、夜勤明けに、偉いじゃないですか」

「家に一度帰っちゃったらめんどくさくなつて絶対に行かなくなつちやうもんね。それで、蘇東坡に関する本を何冊か探して、閲覧室のテーブルの上に積み上げて、いざ開いてみて、覚悟はしていたんだけど、もう驚いちゃったよ」

「イノ君は驚くのが好きですよね」

「だって、一番ふ厚い大きな本を最初にはつと開けて、『やっぱ、マジかよお』って、思わずつぶやいちゃったんだ。ゼンゼン驚くようなことではなくて、あつたりまえすぎるんだけど、漢字だらけじゃんか。『こりゃあ、やっぱ、だめだ』ってんで、パタンと閉じちゃったんだ」

「蘇東坡ですから、漢字だらけなのは仕方ないでしょうね」

「叔父さんってさ、横文字の本はきらいだったよね」

「そうなんですよねえ。アルファベットがページにぎっちり並んでいるのを見ると、頭の芯がむずがゆくなってきます」

「ボクはさ、漢字だらけの本を見ると、かき氷を食べたときみたいに、頭がキーンと痛くなるんだ。だから、高校のときの漢文の授業はできる限り教科書を見ないようにして、ほかのことばっか考えていたんだ。高校出て十数年、あんなもんとはすっかり縁がなくなつて、せいせいしてたのに、一瞬で頭がキーンとなつちやつたってさ、もうまいっちゃつたよ。叔父さんって、ふだんからあんなもんを讀んでんだよね」

「まあ、モグリでも、モグリなりに努力はしているつもりですから」

「その努力っていうのが曲者なんだよなあ。努力すればいいってもんじゃないも



んね。『努力は虚飾』っていうから」

「ん？ それって、何かのことわざですか？」

「トバー君に聞いたと思うよ」

「へーえ、そうなのですか？ 蘇東坡は万能の天才だっただけいいましたけど、普通の人の何倍もの努力をしていたと思いますよ」

「そっかなあ。トバー君は、努力して文章を書いたりしたことは一度もないっていつてるよ。叔父さんはさ、たぶん、いい小説を書いてやろうと、いつも努力してんでしょ。そこが違うんじゃないのかなあ。花が美しいのは自然に美しく咲くからで、美しく咲こうと努力なんかしてないでしょう。もしも花が美しく咲こうとしたら、その意図が透けて見えちゃって、嫌味な感じになってしまうよね。文章も同じなんだよ。だから『努力は虚飾』なんだ」

「ちょっと待ってください。もしかすると、蘇東坡はですね、自分の内側にあるものを巧まずに出すことが肝要だというようなことならいついていたように思いますが、努力をしてはいけないうて話ではないのではないのでしょうか」

「どっちにしても、いまさら努力して漢文と格闘しようという気はボクには100パーないんで、これで終わりかなって、図書館のテーブルにつっぷして爆睡してやろうとしたんだけど、頭がキーンと痛いのが取れなくて、なんかむかついて、ちくしょう、これでくじけたんでは悔しいぞって、とりあえず眠る前に5秒間だけは熟考したんだ」

「ほう、5秒間とはえらく長いこと考えたんですね。感心、感心！」

「だよな。そしたら、頭に浮かんできたのが、『一点突破、全面展開』っていう言葉。これってさあ、よく、あの人がいってるんだよね」

「あの入って？」

「守秘義務があるから誰とはいえないけど、ウチに入所してるあの人の口癖なんだ。とくにね、トイレで大きいを出そうとするときに、『一点突破、全面展開』っていいながら入って行って、出てくるときには『今日も快便、快便、買い弁はセブンかファミマか清月か』せいげつっていうんだ」

「清月って、例のあのパン屋のこと？」

「そうそう。それこそ我が町の超有名人の行った店で、あの人も中学生のときに弁当代わりにあそこでよくパンを買ってたらしいんだ」

「昔はコンビニなんかなかったですからね。『一点突破、全面展開』って、たしか学生運動とかがさかんだった昔に流行った言葉ですよね」

「そっからね、ボクは一つの手を思いついたんだ。目をつぶったままテーブルの

上の本に手を伸ばし、1冊取って、ぱつと開いて、最初に目に飛びこんできたのをとにかく1個だけは覚えてやろうつて。いっくら漢字嫌いでも、1個くらいならさすがに我慢できなくもないからね。それで、そいつをトバー君にズドンとぶつけてやったら、ヤツはきつとびっくりするに違いない。ボクはこれまで一度だって漢文とか漢詩とかについてトバー君の前でしゃべったことがないからね。トバー君が『おっ!』と思ったところで、一気に全面展開つてわけよ」

「ふーん、それで何を覚えたのですか？」

イノ君はコーヒーを飲み干すと、おもむろに立ち上がり、大げさにせきばらいをしてから大きな声で唱えた。

こ  
た  
び  
き  
ぜ  
つ  
へ  
い  
ぜ  
い  
か  
ん  
茲の游の奇絶なること平生に冠たり

詩吟もどきの妙な節が付いていたので、私は思わず吹き出してしまった。

イノ君はすわりながら、

「笑ったな！ ちようど、いまみたいに〇〇でも直立不動でやってみせたら、トバー君は口をあんぐりあけて、もうびっくりこいちゃってさ。それで、『一点突破、全面展開』は半分は成功したかなって思ったんだ。叔父さん、いまのは知ってた？」

「それって、さつき海南島に流されたっていいましたけれど、海南島で何年間か過ごして、ようやく罪を赦され、明日はいよいよ本土に帰る船に乗るといふときの詩ですよ。違いましたか？」

「叔父さんってさすがだね。やっぱ、よく知ってんじゃん。感心、感心、カンシ

ンのまたくぐり！　パチ。パチ。パチ」

「えっ、いまのは？　イノ君、どうしてそんな古い駄洒落を知っているのですか？」

「トバー君がよくいつてるよ」

「へーえ？　でも、カンシンのまたくぐりって、イノ君は意味がわかっているのですか？」

「ぜーんぜん。語呂がいいから真似してみただけ。勘弁べんぞうとか、びつくり栗まんじゅうとか、そんな感じなんでしょう？」

「いちおうこれには故事来歴があつてですね、大昔に韓信かんしんという人がいてですね、とても忍耐強くて、人の股の間をくぐらされるような恥辱にも耐えて、後に大きな仕事をしたつて話があるのですよ」

「トバー君お得意のおやしギャグでも、ちゃんと意味があつたんだ」

「実は江戸時代の流行り言葉ですけどね」

「とにかく、トバー君が口をあんぐりしている間に、『ここで一発、トバー君の「游たびの奇絶きせつ」の数々を聞かせてくれるってわけにはいかなかなあ』って、ぶちかましてみたんだよ。『一点突破、全面展開』のいい作戦だと思わない」

「なるほどね」

「でたために本を開いて、『游たびの奇絶きせつ』っていうのが目に飛びこんできて、これってなんかいい文句じゃんって直観的に思ったんだけど、さえてるって思わない？ボクってなんかそういうところがあるんだよね、たぶん」

「たしかに、うまいキーワードを拾ったと思いますよ」

「トバー君はボクの前でしばらく固まっちゃったんだ。ボクだって、極太千歳飴を食ったとき以上の不転の決意で相当に緊張して詩を唱えたんで、ここはも

う押しして押しまくるしかない、ICレコーダーを取り出し、叔父さんとの約束を話したんだ」

「で、どうなりました？」

「トバー君は『うーん』とうなると、おもむろにライチ・サワーを注文したんだ。で、『南方に流されたときの一番の楽しみがこれでありました。ライチが枝にこぼれるばかりに稔る季節になると、日に300個は食べていましたか。ライチはいつでも憂いを消し、迷いを消し、ためらいを消してくれます』。何やら瞑想するような感じでそういうと、サワーをごくごく呑んで、『よろしいでしょう。ほかならぬあなたのご要望ではあっても、『游たびの奇絶きぜつ』を語り出したならば、かつての私がおとなしくはしていてくれなくなるのを私は恐れます。しかし、このライチに背中を押されました。結構です。それをスタートさせてください』っていつて



くれたんだ。すごいと思わない？」

イノ君はICレコーダーを取り出した。

「それでトバー君が『我が生涯』を語り出したのですか？」

「そうだよ。こっから先は叔父さんの耳で聞いてみて。ちょっと長いんで、パソコンにデータを落として、後で聞いてくれる」

手早くデータを移すと、イノ君はICレコーダーを手につかみ、

「聞いて、おもしろいと思ったら、ボクにいつてくれる。そしたら、また続きを録音してくっから」

「えっ、もう帰っちゃうんですか。甘いもんでも出しますよ」

「今日も夜勤でこれから行かなきゃいけないんだ」

「あれっ、休みだと思ってましたけど」

「急遽、交替なんだ」

「そりゃ大変ですね」

「あつ、それで、一つ頼みがあったんだ。えーとねえ、ジョン・クレアの詩集の新しいのが出ていないか調べて、もしあったら、注文してくんないかなあ。支払いは叔父さんのクレジットカードでね。つまり、録音してきたご褒美ということ  
で」

「えっ、誰の詩集？」

「だからジョン・クレア！ ほら、ボクが卒論で取り上げたイギリスの詩人だよ」

「ああ、わかりました。だけど、急にまたどうして？」

「その録音を聞いたらわかるから。じゃあ、頼んだよ」

イノ君はばたばたと飛び出して行った。

ジョン・クレアは18世紀の終わりから19世紀にかけて生きたイギリスの詩人で、自然や愛を鋭い感性で歌ったその詩に、イノ君は一時期ひどくのめり込んでいた。しかし、就活に難儀し、卒業から半年余り家に閉じこもった後は、ジョン・クレアを一切口にしなくなった。

どうしてまたジョン・クレアなのかと気になり、すぐに音声を再生してみた。店のにぎわいがワーツとままず聞こえてきて、

「ではどうぞ」

と、イノ君の声がした。2、3秒して、咳ばらいがした。

もしかしてここからイノ君が自作自演で語り出すのではないかと疑った。しかし、続く声のトーンはまるで違っていった。イノ君は低く太い声を出す傾向があるのに対して、かなり高い調子のやわらかい声だった。たとえばフーテンの

寅さんに似ている。伊ノ君以外にトバー君なる人物がいることはわかったけれど、フーテンの寅さんがまさか蘇東坡を語るはずがない……。

\* \* \*

いま「游たびの奇絶きぜつ」の数々を語るようにとのご所望を頂戴し、お応えしましょうと申しました。しかし、こうしてスイッチが押されますと、またためらいが生じてまいります。

折に触れて昔語りをしたがるのは老齢に達した者の常でありましょうか。私もそんな誘惑に負ける一人であるのでしょう。手垢まみれになるまで得意の昔語りを何度も繰り返し、すっかりできあがってしまったストーリーを聞かせるのは、話者にはそれなりに楽しいものがあるとしても、聞く側はどうなのでしょう。

まして900年余りも昔です。いまさら何になるのでしょうか。

あなたはこれまで私の詩文について一度もお話しされたことがありませんでした。私が何者であるのかということにも関心がないようでした。それをむしろ奇として、この店にくるのを私は楽しみとしていたように思います。あなたのいつものその口調が、私がどこの馬の骨であろうがそんなことはどうでもいいということは何よりもよく物語っています。

——なんかそういわれると面目ないかも。こんな口のきき方は、ふだん叔父さんとしやべっているのとまったくおなじなんだけど、トバー君とも、なんかそれが一番しっくりくるような感じがしてたんだ。礼節とかを、ちつとはわきまえないとはダメなんだよなあ。



いいえ、いままで通りで結構です。どうかそうしてください。

今夜はいきなり私の詩を持ち出されましたので、はなはだ意表を衝かれました。これではいままでの楽しさが崩れてしまつて、「では、さようなら」………というようなことはいたしませんのでご心配なく。これまでの延長上で「游の奇絶」を語ることが可能であるのなら、これはひよつとするとよい機会であるのかも知れないと思います。

改めて伺いますけれど、あなたはこれまで私のことをほとんど何もご存知ではなかったし、いまも詩文に何ら関心がないと、私は理解していますが、それでよろしいでしょうか？

——本人の目の前ではちよつと9いずらいけど、その通りなんだよなあ。この前、

図書館でトバー君の書いたものを見て、ぞつとしちまって、いま大声を張り上げたのを一つ覚えるのだって、もういやいやだったんだ。自慢するわけじゃないけど、漢文の授業は一切聞いていなかった。漢字ばっか並べた大昔のわけのわからないものを習ってなんになるのか、意味がまるつきりわかんなかった。いまだってやっぱりそう思ってる。トバー君は呑み友だから、そのよしみで「游の奇絶」を聞かせてもらってもいいかなあとは思うけど、漢文の授業みたいなことになるのなら、たぶん眠っちゃうね。

㊦ そのようにおっしゃるあなたであるからこそ、これはよい機会であろうかと思いません。

私が生きていた間は、世間の評判というものは、毀譽褒貶きよほうへん、まさに相反するものがありました。政敵にひどく憎まれ、死地に一度ならず追いやられました。死んでからは、一時期は私の書いたものは全て焼くようにとの命令が朝廷から出されたこともありましたが、時代が下るにつれて、死人に鞭打つ労力をあえて費やそうとする暇人は次第にいなくなり、「毀貶きへん」の方は減り、概ね「譽褒よほう」を為そうとする者が私の詩文を読み続けて下さるようになりました。

人に向かって己を語ろうとするときに、よほど自虐を好む者でない限りは、聞いてくれる人によりよく見られたいとの欲を抑えるのは容易ではありません。どうも「譽褒」を事とするような人を前に、己をより高く見せようとして私が語ったと想像して下さい。聞き手も喜び、話し手も喜ぶという、快感の共有が現出し、およそおぞましいことになってしまふのではないでしょうか。いわゆる狭い言論



空間に閉じ籠って自己陶酔的快感の追及に耽るということです。

あなたがお相手ならその心配はありません。言い換えると、己の生涯に拘泥することなしに、我が「游の奇絶」を語ることが可能になるのではないのでしょうか。

——あのですね、口をはさんではなんなんだけど、いまの説明は意味がわからなかったんだけど。

Ⓣ すみません。日本語が十分に達者でないために、わかりにくい言いまわしになってしまったようです。言いたいのはこういうことです。私についていくらかでもご存知のお方なら、まずはこのことについて聞いてみたいというのがあったりするでしょう。一方で、900年も経てば、昔の自分などは自分であって自分

ではないようなものですけれど、それでも己への執着が消え去るわけではありません。自分について語るのなら、まずはこのことを語っておきたいというのがあったりもします。聞き手と話し手の双方の思いが合致するのが、いわば定番の昔語りということになるでしょう。いまさらそれをなぞるのはどうなのでしょう。あなたが相手であるのなら、あたかも未知の人物を対象とするようにして私が何者であるかを語れるようになるのではないのでしょうか。

——うーん、残念ながらどうもまだよくわかんないんですけど。でも、これ以上ごたごた説明してもらおうとか、先に進めてくれた方がいいかもね。

Ⓣ もう一つだけあらかじめお話しておきたいことがあります。漢文の授業みた

いなことをしたら眠ってしまうとおっしゃいました。私が生きていた日々を振り返るのに、私の詩を抜きにすることはできません。詩には私のそのときどきの思いがこめられているからです。

私の詩は中国の古い言葉で作られています。私は900年以上も昔の人間です。詩はそれよりもさらに古い古典の言葉を使っています。古典の言葉には一つ一つにいろいろな含蓄があり、それを踏まえて用いることで、深い意味、あるいは多重の意味を持たせることができ、それによって情感を揺さぶる力を大きく増すことも可能になります。しかし、そのような効果は、読み手も古典の言葉を十分に知っているという前提があつて初めて生まれるものです。読み手が古典の言葉に通じていなければ、単に難しい漢字の羅列というだけになってしまいます。あなたが聞いていなかった漢文の授業では、その前提を成り立たせようとして、言葉

の意味を細かく解説しなければならなかったでしょうから、さぞかし退屈であつたろうと十分に推測できます。

——せめてそんなふうな説明でもあれば、ちつとは聞く気にもなったかも。とにかくめんどつちくて、つきあっちゃいられないって思ったんだ。

㊦ 面倒で付き合いきれないというのはあなたばかりではなく、昔の人も同じです。私より100年ほど後輩に陸游りくゆうという人がいました。陸游は当時の優れた文人でありましたけれど、その人にしても私の詩の言葉の意味が掴めずにはばば悩ましい思いをしたと書いています。自分で言うのも何ですけど、私は語彙が相当に豊富で、かなり難解な言葉遣いを好んでしていたのは事実です。後世の人

はとりわけて難解な詩句を前にすると、「またいつもの癖が出た」と、苦笑しつつ敬遠したのでした。

陸游は、杜甫とほの詩に付けられたおびただしい注釈を見て次のようなことを書いています。杜甫は名前ぐらいはお聞きでしょう。私が最も尊敬する3人のうちの1人ですけれど。

——えーと、杜甫というです。ねえ、李白りはくと並ぶ漢詩で一番有名な人だつてくらのことは、漢文の授業は眠っていたボクでも聞いた気がする。で、3人というのはだれ？ どうせ聞いてもわかんないだろうけど。

① あとの2人は孔子こうしと陶淵明とうえんめいです。3人についてはまたいつかお話するとして、

陸游の文章はこんな感じですよ。

「近頃の人は杜甫の詩の一語一語に出典を求め、熱心に注解を付けている。しかし、注解を精密に施すことと、詩を深く理解することとは全く別の話だ。杜甫の詩が絶妙であるのは一語一語の出典に由来するのではない。そこらの人が作った詩にだって、故事来歴の三つや四つは容易に探し出せる。それでべたべた注をくつつけたからといって、その詩が下手くそであるのを何ら妨げはしないのだ」。

あなたも図書館でご覧になったように、私の詩集を開くと、そこにはたくさん注が施されています。それらの注は、私の詩が下手くそであることを隠してはくれませんが、逆に、注がなくてはならないようなところをすっかり取り去ってしまった後に、もしも下手くそでないものが残るのであるならば、それは本物だということにはならないでしょうか。

——えっ、どういうこと？

㊦ ごちやごちやした注釈を取り去る最も簡便な方法の一つは、私が必ずしも得意とはしないあなたの国の言葉で、耳で聞いて即座にわかるように私の詩を語り直すことであつたりはしないでしょうか。かなり傲慢に聞こえるかも知れませんが、私の詩に優れたところがあるものならば、たとえ使い慣れない言葉で語り直しても伝わるものが何かしらあるはずですよ。伝わる伝わらないの判断をするのは、もちろん私ではなくてあなたです。

ところで、あなたは、大学でイギリスの詩を勉強したんですよ。

——えつ、そんな話をしたっけ？ あつ、そつかあ、トバー君が詩を作る人だつてわかったときに、ボクも詩には関心があったみたいなことをうっかり口走ったかも。

㊦ ちらつとそうおっしゃいました。数多いイギリスの詩人でああなたの関心をとくに強くひいたのが誰であったのか、ここであててさしあげましょうか。

——えーと、学生時代にイギリスの詩を読んでいたころのことを思い出すとちよつと辛くなるんで、具体的に誰の詩とかは絶対にいってないはずだけど……そうだよ、いった記憶は100パーないもの。



㊦ ええ。でも私にはわかりません。あなたは、ジョン・クレアでしょう。違いますか？

——えーつ、びっくりだなあ。当たりだけど、あのさあ、ボクのことどっかで調べたりした？ 何かで検索すると出てきたりする？

㊦ いえ、検索するまでもなく、あなたとは何回かここで話をしてきたのでわかります。

——でもさあ、ジョン・クレアって、そんなに有名な人でないし、だいたいトバー君がイギリスの詩人を知ってるっていうのもなんかヘンな気がするけど。9

00年以上も昔の中国人なんだから。

㊦ そうです、900年以上も昔の人間です。ということは900年以上も時間があったわけで、イギリスの詩だってなんだって読むことができます。ジョン・クレアといえは最もよく知られるのが、こういう詩だったでしょうか。

*I am! yet what I am, who cares or knows?*

ああ、いけません。私も昔は記憶力がよくて、3回読めばどのようなものでも覚えられたのですが、この年齢になると、1行目しか思い出せません。

——いやいやいや、1行だけでも、すぐに出てくるなんて、マジで、びっくり栗まんじゅうだ。

① この詩の冒頭の「I am!」を、日本語ではどう訳すのでしょうか？

——えーと、それは「おれは 生きている！」って、訳してたよ。高校生のときに、叔父さんの本箱に、なぜかイギリスの詩の本があるのを見つけて、珍しかったんで手に取ってみたんだ。それが英詩との最初の出会い。叔父さんは英語がいを自慢にしてる人で、なんでこんなのがあるんだろうって、ぱらっとめくってみたんだ。そしたら、「おれは 生きている！」っていうのが目に入ってきたんだよ。もういきなり、その詩にわしづかみにされたみたいになっちゃったんだよ。

ジョン・クレアが精神病院に隔離されてしまったときの魂の叫びなんだよ。なんかそんなときのボクのご感覚と合っていたんだよね。あのころぼくは1人ぼっちで、誰もわかってくれない、ボクなんか存在していても意味がないって、そんな感じだったから。その本にはジョン・クレアの詩はそれ一つしかなくて、もっと読みたいって思ったんだ。学校の勉強は、漢文に限らず、どれも好きじゃなかったけど、初めて英語を勉強して原詩を読んでみたいって思ったんだ。

あつ、いっけねえ。こんなことしゃべる気なかったのに。もうずっと忘れていたはずなのに。

㊦ ジョン・クレアとの出会いが生まれたのには、「おれは 生きている！」というその訳がよかったということもあったのではないだろうか。

——たぶんね。その本の付録に原文があつて、「I am!」をこう訳すんだって、かなりびっくりしたんだ。「I am a boy.」とかつて、中1で最初に教わるけど、「おれは 生きている!」って訳文には絶対にならないもの。

① あなたとはこうしてあなたのお国の言葉で話していますけれど、私は日本語は得手ではありません。ですから、「おれは 生きている!」のようは魅力的な訳し方ではできません。私の詩を日本語を用いてこれからあなたにお話するのに、ごくつたない訳では興味を持っていただけるのかどうか自信がありませんけれど、まずは一度試してみましようか。訳すまでに少しばかりお時間をいただけますか。

——そんなじゃあ、イカでも注文すつからさ、焼き上がるまでに……くれぐれも難しく考えなくていいから。イカだけにテキトーでいいからなんちゃって……マジでオヤジのダジャレですんません。

① では、手始めに、さっきあなたが取り上げて下さった詩でやってみることにしましょうか。耳でお聞きになって通じにくいところが少しでもあつたら、どうぞ遠慮なく指摘してください。

一応は詩の背景を少し説明しておきましょう。本でご覧になったかも知れませんが、元符<sup>げんぷ</sup>3年6月20日の夜に作った詩です。西暦でいうと1100年です。

場所は海南島<sup>かいなんとう</sup>。海南島は台湾よりも南に位置し、ベトナムに近い島です。いま国際的に大きな問題になっている南沙諸島に出て行く中国の漁船はだいたいこの島

を拠点としています。昔の中国人にとって海南島は遙か彼方の南の果てで、しばしば流刑地になりました。国家にとって極めて好ましくない人物ではあるけれど、あからさまに殺すのは具合がちよつとよろしくないという場合に、名目上の職務を与えて、海の方こうに飛ばしたのです。

私は罪人として3年間を海南島で過ごし、中央で政変があつて罪を赦され、明日はいよいよ本土に向かう船が出るという夜でした。昔の6月ですから、まさに酷暑の時候です。

むせかえる真夏の夜は、

冬の星座のオリオンが昇ってくる刻限になると、

趣きが一変し、

ひどい降り方だった雨も、吹き荒れていた風も、ぴたりとおさまり、  
みごとに晴れ上がった。

月があかあかと照り輝き、

その光を雲がかげらすことはもうない。

天と海は、

もともとの澄んだ清らかさを取りもどした。

かつて、正しい道の行われない国から飛び出し、

海に筏を浮かべたいと、

こうし  
孔子と同じように夢想したこともあった。

はからずも海を渡ってこの島に流され、

太古の素朴な世のありさまを私はほぼ知ることができた。



南の果てのここなら、

たとえ九回死んでも恨んだりはしないだろう。

今回の旅こそは、

我が一生のうちで最も特筆すべきものとなったのだから。

どうでしたか。こんな感じで、おわかりいただけでしょうか。

——そうだなあ、だいたいはわかったけど、「孔子と同じように」っていうのがちよつと。孔子は、さつきいつてた3人の1人で、『論語』ろんごの先生だよね。それくらいならなんとなくは知っているけど。

㊦ 孔子は、私たち古い中国人にとって最も偉大な文化の導き手でした。孔子は、乱れた世を正し、人々が安心して暮らせる平和な国家をつくるにはどうしたらいいかということ深く考え、それを実践に移そうと務めました。孔子は、真に平和な国は、武力によってではなく文化の力によってつくられると考え、高い志を持ち、強靱な精神力で困難に立ち向かいましたが、その孔子にしてもくじけかけて、海に筏を浮かべ、世の外に出てしまいたいと思っただけがありました。現実はそのほどまでに厳しかったのです。

平和な国家の理想の姿として孔子が考えたのが、当時よりも500年ほど昔の、周の時代の文王ぶんおうの政治でした。現代の歴史学の知見に照らし合わせれば、孔子は歴史的現実を直視していなかったということになるのでしょうかけれど、古い中国人は正しい規範は古き良き時代にあったと一般的に捉えていたので、孔子のこの

見解は長く受け継がれ、私もその通りに考えていました。

私が流されたところの海南島は文化から遠く隔たった辺境の地と見なされてきました。私は島で土地の人たちと触れ合ううちに、文王の時代よりもさらに昔の、太古の素朴な世とはこういうものであったのではないかと、実感を伴って考えられるようになりました。言葉も十分に通じない島の無名の人々に私は教えられたのでした。それがいかに貴重な体験であったかを、6月20日の夜に改めて知り、我が一生のうちで最も特筆すべき旅であったと詩に詠んだのです。

次の朝、私は海南島を後にし、大陸復帰を果たし、都へと向かう旅路にのびました。私には海南島での経験を活かして次に目指したいものがありました。しかし、道の途中で病気になる、都に行くのを断念し、1年ほどで死を迎えたのでした。

6月20日の夜は私の最後の旅の始まりであったということができるといえるでしょう。逆に最初の旅はいつであったのかというと、24歳のときに都に向かった旅であったのでしよう。そのあたりから始めて、「游の奇絶」を、いまのように詩を訳しながら、順に語って行くというようなことではどうでしょうか。

——はい、それでいいと思うけど、トバー君がどうして島流しになったのか、その訳から聞いてみたい気がするんだけど。だって、島流しにされるような人には見えないもの。ちょっとヘンな叔父さんだけど、悪いことをしたわけではないんでしよう？

Ⓣ ある人たちには許し難い悪人であると見えたのでしよう。「毀誉褒貶」の針

がどつちに振れるかで、私は流されもし、都に呼ばれもしました。私が悪いのか、どうなのか、それを話すにはやはり順を追って行かないとならなそうです。

それはそうと、いまふと妙なことが頭をよぎりました。あなたとは、もしかして、900年前にも会っていて、このような感じで話をしたのではなかったでしょうか。900年前のこと、憶えていませんか？

——やめてくんない。わざとあやしいことを言い出して。ボクはよく叔父さんに向かってヘンな法螺話をするけど、トバー君にもおんなじようにされたら、なんか気色悪いよ。そうでなくても、トバー君といるとあの千歳飴うどんみたいなヘンなことがおこったりするし、だいたい、900年以上前に死んだはずの蘇東坡だっというのからして十分に気色悪いんだけどさ。



あれは24歳で都に上った旅を無事に終えて少し経ったころのことでした。

今度は一転して真冬です。都の近くのある町でした。

どこもかしこも雪がいっぱい積もり、

古びた宿場はひっそりとして人影がなかった。

そこに北から一人の旅人がやって来た。

降り続く雪のために、払っても払っても追いつかないのだろう、

笠にうず高く雪を載せて、その人はやって来た。

馬から降りて、宿へと入って来たその顔を見ると、

寒さのせいでこわばり、青を通りこして黒いくらいだった。

私は旅人を招き寄せ、

温めた酒をすぐに持って帰るよう、宿の者に言い付けた。

旅人は酒を手にしたものの、

体が凍えすぎてしまったのだろう、

飲み下すことさえなかなかできなかった。

どこの誰であるか互いに言い出すこともないままに、

二人で酒を酌み交わした。

私は杯に軽く注いでちびちびやるのだが、

旅人は体が温まってくるとともに調子が出て来たのだろう、

いつしか樽をさかさまにして呑み尽すまでになった。

大雪のために宿は昼間のうちに門を閉ざし、

二人は大いに語り合って、

夜が更けるのも知らずにいた。

翌朝、ぴしりと馬に鞭を当てると、

旅人はたちまち走り去った。

とうとう最後まで二人は名乗り合うことがなかった。

今日のいままで、心のどこかで、あなたのことを、このときの旅人だと思っていたのかも知れません。ようやく再会を果たしたような気分であったから、あなたと親しくお話しするようになったのでしよう。そう思うと実に愉快ではありませんか。



——あのですね、そのときの旅人だつて勝手に思うのはトバー君の自由だけでも、この前は、亡くなったお姉さんに似ているっていったように思うんですけど。これって、思いつきでころころテキトーなことばっかいつてんじゃないのかって、疑っちゃうんだけどなあ。

㊦ ああ、そのように申しました。若くして死んだ我が姉にあなたが似ているのは確かです。だからこそ、このときの旅人だとも思うのです。我が姉が旅人になって私の前にふっと現れたのではないかとも思うからです。

——どうということ？ ああいえばこういうで、テキトーなことばっか？

① 我が姉は、何ものにも縛られない自由な旅人として生きてきたことに違いないのです。だから、雪の日の旅人として私の前に現れたのです。いま思えば、女性の身として生きなければならなかったことに姉は強い束縛を感じていたでしょう。あなたもそうなのでしょう？

——そんな話はそれこそしてなかったよね。ボクがこんなふうな話し方をしてるのは、礼節をわきまえないっていうのもあるけど、自分にはこれが合っているはずだと思うからなんだ。それを、トーバー君の前では隠す必要はないって、最初から感じてはいたよ。トーバー君がそういう人じゃなかったら、ここで何度も呑んだりするはずないし、お年寄りの自慢めいた「我が生涯」を聞く気にはまるつきりならなかったよ。

㊦ いまの時代であれば、我が姉もここに来て、あなたとともに悩みや喜びを共有できたでしょうけれど、女には女の生き方しかないと言われ強固に考えられ教えられていた時代ですから、悩むことさえも許されていませんでした。そのために、我が姉はわずか18歳で死なねばならなかったのです。いえ、はっきりと殺されたと言わなければなりません。

——えっ、どういうこと？ 聞きたい気がするけど、もしも辛くて話ずらかったら、申し訳ないけど。

㊦ 「游の奇絶」から横にずれてしまいますけれど、私にとってもとても大事な

ことなのでお話したいと思います。

我が姉は16歳で結婚し、その嫁ぎ先で死に至らしめられたのです。数えの18歳でしたから、ちょうどあなたがジョン・クレアの詩に感動したのと同年齢ということでしょうか。我が父は強く憤り、深く悔やみ、8年の間は胸の奥底に封じ込め、事件について一切何も言いませんでした。我が母が亡くなった後に、ようやく封印をほどこき、事件のあらましを詩に詠んだのでした。

詩には次のような序文が付けられました。聞いてください。

私は生まれてからずっと他人を害するようなことはなかった。村で育った幼いころも、大人になって遠く旅するようになってからも、きちんとした人とはかり付き合い、不義を為すような人からは遠く離れていた。五十一歳になったいまに至

るまで、人から咎められたことはなく、人を咎めたこともなかった。たった一つの例外を除いては。

いまから八年前に我が娘を失ったとき、始めはその夫の家を咎めた。いまは我が身を深く咎めている。

我が娘は幼いころから学問を好み、正しいことを貫こうとする気概は男以上に強いものがあり、文章を書けば私を驚かせるものがあった。娘は十六歳で我が妻の兄の程濬ていしゅんの息子の程之才ていしさいの嫁となった。そして十八歳で死んだ。

程濬は儒学じゅがくを修めた者であったのに、家の中はきちんとしておらず、妻や子が無法を為すのを放置していた。我が娘はその家の人々のありさまを見て、心に楽しまないところがあった。我が娘が病気になったとき、その夫もその舅もその姑も全く顧みず、これを棄てて死に至らしめた。

娘が死んだとき、私は怨み、我が親戚ではあっても程濬が不実であることを咎めた。

我が友人が深く悲しんで私に言った。『君はなぜ程濬を咎めるのか。君は程濬が賢者であると思つて娘を嫁がせたのではなかったのか。過ちは、人をきちんと思はなかつた君にあるのではないのか。なのに誰を怨もうというのか』。私はそれを聞いて深く悲しんだ。

それから八年が経ち、私は自分を咎めるこの詩を作った。

この序文にありますように、我が姉は、姉から見ても、伯父の息子と結婚し、わずか2年で死んでしまったのです。父の怒りと悲しみはどれほどのものであつたのでしょうか。母の苦しみはどれほどのものであつたのでしょうか。父は母が生きていた間は怒りと悲しみを封印し、何も言いませんでした。そして、ひとたび

封印をほどこいたとき、父は詩を作っただけでなく、驚くべき行動にも出たのです。

——お父さんは、奥さんに遠慮して黙っていたってこと？

㊦ 父は、自分以上に辛かろうと、母のことを慮っていたのでしよう。

母が死んで、父は生きる基盤をそっくり都に移す決心をし、私と弟を連れて故郷を離れました。それが24歳のときの私の「最初の旅」です。旅に先立って父は先祖の事績を調べ、『蘇氏族譜』そしぞくふという系図を作り、先祖の墓に捧げました。100人ばかりの親類を集めた式典を挙行し、その場で父は人々に向かってこのように言いました。

かつて我が一族の風俗は美しいものでありました。私が子供のころは、もしも不義を為す者を見たならば、一族全員が憎み、化け物でも見てしまったかのように心がやすらかでなくなりました。その後、その風俗はやや衰えましたけれども、不義を為す者を見れば軽蔑して笑ったものです。しかしいまは不義を為す者を見ても何とも思わなくなっていました。そのように我らの風俗を変えてしまったのは他ならぬあの人物です。

あの人物は人の上に立つような者であるのに、我が郷里の風俗を大いに乱しました。あの人物は速やかに人々を不義へと誘い、深く深く我らを害をしました。あの人物には肉親の情というものがなく、その兄の子が孤児となったのを憐れまずに棄てて顧みませんでした。あの人物には兄弟助け合う心がなく、先祖の財産を孤児に分け与えませんでした。あの人物には節度がなく、孤児が訴訟を起こすとそ



れを打ち碎きました。あの人物には倫理観がなく、妾を愛して正妻の上に置き、息子ともに声色にふけて、家の中の秩序を滅茶苦茶にしました。あの人物は飽くことなく財産を求め、富むことが賢さの証であるとして、廉恥というものを消し去ってしまいました。

これらのことは我が一族は大いに恥じてとても許容できないものであったのに、いまでは『あの人もやっているのだから』と我が郷里の人々全体を惑わすまでになっっています。あの人物は高い地位にあって力があり、我が郷里ばかりでなく、もっと広い地域を惑わし、巧みな言葉で飾ってごまかし、人々を欺いています。あの人物はまことは大盗賊であります。私は皆に向かってこのことを言わずにはいられません。あの人物を見て我が身の戒めとして、決してあの人物と付き合っ  
てはならないのです。

1000人もの人々の前で、我が父がこうして激しく攻撃した「あの人物」とは、我が母の兄の程濬ていしゅんです。程濬は高い地位にある役人で力があり、それによつていわゆる「不法ではないけれど不適切」な方法で財産を稼ぎまくつて、好き放題をしていたのです。我が姉を程濬の息子のところに嫁に出したとき、我が父は程濬がよもやそのような裏のある人物であるとは全く知らずにいたのです。孔子の教えを学んだ人間が、よもや低劣な行為を平然と為しているとは想像すらできなかったからです。父は、学んだことはその通りに実践すべきであると考えていました。それこそが孔子のまさしく教えであつたからです。

——お父さんの怒りが伝わってくるね。

お父さんは、お姉さんは学問を好み正しいことを貫こうとする気概があったと、書いていたけど、お姉さんはどのような人だったの？ トーバー君は1歳下だったというから、お姉さんが亡くなったときには17歳で、いろんな事情もわかっていたんだよね。女性の身として生きなければならなかったことに強い束縛を感じていたって、どういうことなの？

㊦ 私は少年のころから、野を駆けまわるのを好み、山の奥にもよく入り込んでいました。我が本性は鹿であると、私は思っていました。姉は元来、私以上に鹿であったのだらうと思います。それも堂々とした角を持つ牡鹿であったのです。正しいことを貫こうとする気概は私より遥かに強いものがありました。姉は女としてではなく男として生まれるべきであったのです。

姉も年頃になると、自由に家の外を駆けまわるようなことは許されなくなりました。私が12、3歳のころでした、山中で暮らす隠者に偶然出合っただけで強い印象を受け、姉にそのことを話しました。姉は、ぜひ自分も会ってみたいと言いました。私は姉の希望を叶えたくて、弟を身代わりに姉の部屋に残して姉を連れ出しました。山に向かうそのときの姉の嬉しそうな顔といったらありませんでした。険しい山道をもともせず歩き通し、昼近くに隠者の小屋に着きました。残念ながら、その日は留守で、しばらく待っても帰って来なかったので、仕方なく下山したのですが、それでも姉は山に行けたことをたいそう喜んでくれました。

そして、10日ほど経って、姉はまた山に行きたいと言いました。私は度々重なることを恐れましたけれど、同じようにして連れ出しました。今度は幸いにも隠者に会えました。姉は隠者に向かって矢継ぎ早に質問をあげかけました。

山での暮らしを詳細に尋ねる姉の様子に私は不安になりました。見る見る日が傾き、なおも留まろうとする姉の背を無理に押して、山道を下りました。途中で日は沈んでしまい、月明かりを頼りにようやく家に着きました。家に入る前に、姉は地面にしゃがみ、「この月の光を拾って持ち帰りたい」ときびしげにつぶやきました。

ああ、そうなのです。月の光です、ジョン・クレアの詩に、月の光が拾えるよ  
うだと歌ったのがありましたでしょう。

——えっ、そうだっけ？

① そのときはむろんジョン・クレアよりずっと昔の時代ですから、姉は李白りはくの

「月下独酌」の詩を想ったのだろうと私は考えました。月と自分と影の3人で酒を呑めば孤独ではないという詩です。姉はわかっていたのでしよう。もう二度と山には行けないので、せめて月の光を持ち帰って、李白のように孤独の魂を慰めたいと考えたのでしよう。

姉のその心はジョン・クレアに通じ、あなたに通じ、だからあなたはジョン・クレアを好んだはずと考えたのです。

——そうなの？ でも、ジョン・クレアのその詩をボクはまだ思い出せないんだ  
 けぞ。

Ⓣ 家に戻ると、真っ暗な姉の部屋で弟が小さくなってうなだれていました。こ

んな遅くまで姉の身代わりとしてごまかすことができないのは明らかでした。その日は幸い父は他所に出ていて帰らなかつたのですが、母にはひどく叱られると覚悟しました。しかし、母は何も言いませんでした。

弟は「母上を悲しませないよう、姉上をお山にお連れするのはこれきりにして下さい」と私に言いました。弟は当時まだ10歳を超えたばかりでしたけれども、まことに心細やかで、家族全員の心の内を的確に見抜いているようなところがありませんでした。

そのころすでに姉の縁談話が進み始めていました。母は、どこか普通ではないところのある娘を心配して、自分の兄の家に嫁ぐのであれば、少々のことなら穏便にすませてくれるであろうと期待していたようです。

私はどうしたらよかつたのでしょうか。姉をもう一度連れ出し、山の隠者に託し

たらよかったのでしょうか。そうすれば、いつときは母を悲しませることになつても、姉は死なずにすんだのでしょうか。でも、姉のあのような死は誰も予測できるものではなかったのです。

それでは、我が姉が死んで8年後に父が詠んだ詩を聞いて下さい。

五月のある日、一人の女が死んだ。

何も訴えることができずに、

この女は無理やり死なされた。

この女の父は意気地なしで、

この女の無実の魂を小さな塚に埋めてやることしかできなかつた。

生と死、長寿と短命は定めなきものであるから、



これも仕方ないということにしてしまっていていいのだろうか。

この女の死は人々を驚かせ、

聞く者は顔をつらそうに歪めた。

この女の家は代々学問を好み、

この女は女ひと通りのことだけでなく、

書物を読むことも文章を書くこともきちんと教えられた。

家は貧乏だったけれども、

あえて裕福な家に嫁がせようとはしなかった。

父は釣り合わぬのは不幸のもととなるのを恐れたのだ。

この女の母の兄が、この女を息子の嫁にほしいと求めた。

人々は母の家は豪族であるからまことにいい話だと言った。

この女の父はそういう理由ではなしに、

母の兄も学問を好み、

お役人としても立派な人であると思ったので、

この女は十六歳で嫁いだ。

嫁いだその日から、

この女には憂いばかりが増え、

喜びというものがなくなってしまった。

里帰りしたときに、

この女は両親を見て泣いた。

自分の家のことは言えませんが、

この女は口を閉ざしたけれど、

およその様子は知れた。

舅も姑も夫も道理をわきまえず、

家の中はでたらめなことになっていた。

この女は元來曲がったことが大嫌いで、

しかし、たった一人ではどうすることもできず、

見て見ぬふりをするのもまた辛いことであった。

この女の父は心の内で憤りを発したけれど、

妻として夫を諫めてよき方向に導くようになさいと諭した。

この女は父に言われた通りに努め、

翌年には子授かり、

嫁としてまずはひと安心ということになったのだが、

この女はじきに病気になり、

家の者は誰も看病しようとしなかった。

この女の母はそれを聞いて憂いに沈み、

この女の父はただ驚くばかりであった。

このときこの女の舅は愛妾に溺れ、博打に興じていた。

この女の父はどうとう娘を家に連れ帰ることにした。

舅は「えせ学者め」と罵り、

言うのもはばかれるようなごたごたの末に、

この女は里に帰り、

十日余りで薬が効いて来て快方に向かい始めた。

病の根を断つまでには至らずとも、

息が通って、滋養のあるものを少しずつは食べられるようになった。

しかし、舅と姑はこの女の再生を許すまいというのか、

悪巧みを巡らして、この女を連れ去った。

「ここにはどんなことがあっても二度と帰らせないぞ」

舅と姑が吐いた言葉を、

病んだこの女はどのような気持ちで聞いたのだろうか。

この女の父と母は泣くしかなかった。

この女の病はたちまちもとにもどり、

三日の間放置されて死んでしまった。

この女が不義をなす者であったのなら、

死んでも何も言えないだろう。

この女は、正しいこと、慎ましやかであることを好み、

鋭敏で明晰であったのだから、

このような譴責を受けなければならぬ理由はどこにもなかった。

この女の父は天を仰ぎ見て、

信じるに足るものはどこにあるのかと思わないわけにはいかなかった。

このことを聞いた者は、

この女の父には勇気がなくて、

この女が罪なく死んだことをはっきりさせないのを不満とした。

この女は果たして恨まずに死んだのか。

誰かの罪であると咎めつつ死んだのか。

この女の父はそのことを思っずと苦しんだ。

宝玉などというものはもともとは価値あるものではないのだから、溝に棄てたところで少しも構わない。

親として大切に育てた娘を野に棄ててよいものか。

ああ、罪はまさしくこの女の父にあったのだ。

——うーん、重い内容の詩で、きつとこんなことを聞いてはいけなのだろうけど、「女が罪なく死んだのをはつきりさせない」ってあったけど、舅の家のひどきを訴えて、出る所に出て争うということはしなかったの？ どういう悪巧みだったのか知らないけれど、病氣のお姉さんに向こうの舅たちが連れて行こうとするのを、止めることはできなかったの？

Ⓣ まことにもっともな疑問です。いまなら許されることではないでしょう。しかし、向こうの舅は地位の高いお役人で、我が父は一介の庶民でした。出る所に出て争っても勝ち目はありません。女は嫁せばそちらの家の人間になるので、病気だからといって無理やり連れ帰った父の方がむしろ不法の行いをしたということにさせられてしまいます。舅の一族はその地方の有力者で、我が一族はまるで及びませんでした。我が父にしても、母と結婚したことで、向こうの一族から何かと援助を得ていました。父は誇り高い人でありましたから、援助など受けたことはないと言っていましたけれど、実体はそうではありませんでした。向こうの一族にはとても逆らえる状況になかったのです。

ですから、母が亡くなり、これから都に発つというときになって、万を持して向こうの一族との断絶を宣言したのでした。



——そういうことでトバー君の「最初の旅」が始まったのか。その背景にはとても重いものがあつたってことだね。

① 思うに、我が姉は最後の3日間に、まだ息があつたときに、ジョン・グレアのように「おれは、生きている！」と叫びたかつたに違いありません。私はその声を聞くことができませんでした。私は父以上に無力でした。我が父は姉の死から8年後に詩を詠みましたが、私は自分の思いを、900年以上も経ってから、初めてあなたを相手に口にしたのです。それはあなたがどこか姉に似るからなのでしよう。

——うーん、そうなの？ そのお姉さんと、こんなボクが似ているとはとても思えないんだけどなあ。ボクには正しいことを貫こうとする気概とか何もないし。

① それでは「游の奇絶」を語るとしましょう。スイッチを押していただいてからずいぶんと時間が経ちました。まだ何も進んでいません。そもそも私がどこの誰かということさえまだ申し上げていません。

わたくし、生まれも育ちも眉州眉山びしゅうびざん県です。岷江びんこうで産湯を使い、姓は蘇そ、名は軾しやく、人呼んでフリーテンのトーバーと発します。

眉州眉山県とはいまでいう四川省しせんの眉山市びざんです。岷江は長江ちやうこうの支流の一つです。

本名は蘇軾そしやくです。よく蘇東坡そとうぼと言われているのは、東坡が別名、号ごうであるからです。景祐けいゆう3年12月19日に生まれました。西暦でいうと1036年です。

最初の旅は、嘉祐かゆう4（1059）年10月に眉山県を発ちました。我が父は母の一族と絶縁し、故郷とも決別するばかりの覚悟で都に向かい、一艘の船に我が一家の全員が乗り込みました。父と私と弟、2人の乳母、私と弟のそれぞれの妻、そして生まれて数カ月の私の息子の合計8人でした。

——えーと、乳母が2人？ それって、どういうこと？ トーバー君と弟のそれぞれに乳母がいたということ？ なんか金持ちっぽいなだけ。



我が家は裕福ではありませんでしたけれど、私と弟のそれぞれに乳母がつい

ていました。乳母といいますが、子守をするだけではなくて、家事全般、あらゆる仕事をしていました。昔は他家に仕えて一生を送るような女性が大勢いたものです。

私の乳母は任採蓮じんさいれんといい、やはり眉山県の生まれで、13歳のときに我が母の生家に雇われました。実質的には人身売買と言っているのでしょうか。そういうことでなければ生きていけなかったのです。

任採蓮は我が母と同年でした。18歳で我が母とともに我が父のもとにきました。そして亡き姉と私を育て、母が亡くなった後はずっと私のもとにいて、私の子供たちの面倒をみてくれました。私が官職に就いて各地を転々するのに従い、黄州に流されて半年、私がまだ挫折感と闘っているときに、72歳で死にました。流罪の身では日々の生活もなかなか厳しく、故郷の眉山県に葬ってやることが

できなくて、黄州の丘に埋めました。自分が生んだ子ではなくて他人の子ばかりを育て続けた任探蓮の生涯が幸福であったのかどうか私にはわかりません。住む場所と食べる物に不自由させることだけは、たとえ流罪となっても、なかったとはつきり申し上げられます。

——やっぱ、昔は女性は生きるのが大変だったんだ。

それで、8人が乗ったというのはどんな感じの船？ まさか、何百人も乗れるクルーズ船みたいなものってことはないと思うけど、逆にちっぽけなボートみたいなもの？

Ⓣ

大きさをいうと、そこらの漁港につながれている釣り船とそれほど変わらな

いでしょうか。やや幅広で、背が低くて全体として平べったい形をした船でした。

隅田川などで見る屋形船より少し小型で、それに帆柱を立てたら、だいぶ近い感じになるでしょうか。広さが十畳敷きほどの茅葺の平屋が載っていると想像していただくといいでしょう。そのような船を3人ばかりの漕ぎ手ごとチャーターして岷江を下りました。

——あまり大きくもないそんな船で、川旅の間は一家全員が寝泊まりしたってこと？　なんか窮屈そうだけど。

㊦ ええ、狭い船にずっと閉じ込められていると息が詰まります。夜だけは陸の宿で休むということもありました。当時の旅はいまと比べたらとんでもなく不便

で、とくに生まれて間もない乳呑児を抱えた妻は大変でした。それでも、それなりに旅がしやすいような環境がある程度は整えられていました。川沿いの要所要所に町があり、宿泊施設がありましたし、町から離れていても、船を繋ぐような場所が設けられ、いまある道の駅とは程遠いものでありましたけれど、土地の者から食べ物や薪を買ったりできるようになっていました。陸の宿はいまのホテルとはまるで違い、屋根の下で寝られるだけで幸いという程度のもが多く、基本は自炊でした。船頭や乳母たちで食事を作ったりしてくれました。

私は、例の鹿の本性で、とくに初めのうちは船の旅に慣れていないこともあって、町に着くと、船頭が縄で岸辺に繋ぎ止めるのももどかしく、すぐに飛んで陸に上がり、体のあちこちを伸ばして、そこらを歩きまわったものです。

眉山県を発つて数日、嘉樹かじゅという町に着いたときも、すぐに船から出て、あた

りをひと巡りし、少し気が晴れたところで戻ってきますと、父が見知らぬ人と立ち話をしていました。2人は大きな声で、笑ったかと思えば憤慨したりと、かなり派手にしゃべっていて、往來の人がげんそうに眺めていました。相手の男は下級の役人でした。当時は、社会的な役割や地位によって身に付けるべき服装が定められていて、見ただけでだいたいのがわかりました。

ごく親しげな様子でしたから旧知の間柄かというところではありませんでした。父には、初めて会った相手ともたちまち打ち解けて、何十年來の知り合いであるかのように、心を許して語らせてしまう特技がありました。それでたくさん友人を得て、著名な方々とも知り合いになったのです。そのような父を見ていたからでしょう、後年私も父とよく似た振る舞いをするようになりました。

父は私と弟を呼び寄せ、その役人に挨拶するよう言いました。見たところ50



歳を超えていて、当時ではすでに初老とっていい年齢でした。肩幅が広くがっしりとした体つきで、背は父より頭一つ分くらい高く、厳めしい眼差しが印象的で、この田舎町の役人にしておくには何やら雰囲気異なるものがありました。

その人は船で行き来する商人から税を徴収する仕事をしていて、郭<sup>かくりん</sup>綸という名でした。父は自分たちのことを事実とは少し違えて、都にいる親類を頼って心機一転、これからの身の振り方をさぐりに行くところなのだと告げました。私と弟は書生風の服装でしたから、いかにも世渡りに疎いと見えたのでしよう、

「都というところにはあつしは行ったことがござりませんが、まこと繁華である一方で、その蔭には冷たい世間の風というものが吹いていると聞きます。都に出てうまく行った者は10人に1人にもならないとか。若い人はつい甘い期待を抱き、そこに付け込まれて騙されやすいものでござります。せいぜい気を付けなごさ

るがよろしいでしょう」

郭綸がそのように言いますと、父は、

「おつしやる通り、とにかく世間知らずの連中です、都に出てどんなことになるとも知れません。もしよろしかったら、いまお話されていたことを、この息子どもにも聞かせてやってはいただけないでしょうか。世間の厳しさを教えてやらんといけないと思ひましてな」

「いやあ、つかうかうかと昔話なんぞをしてしまいました、それはどうも弱りましたなあ。お若い方々にお聞かせするようなことではございませんので」

郭綸は渋りながらも、実のところは話したい様子で、父が丁寧に再度頼みますと、

「お見受けしたところ、皆様方は学問をなさっておられるご様子。あつしらのよ

うな者とは生きる世界がいささか異なりましょう。それでも、世の中にはこんなこともあるんだと、お慰みにお聞きいただきましょか。思えば、もう20年も昔になってしまいました。お若い方はきつとご存知ありますまい。かつてこの国の屋台骨を揺らがすような騒動があったのを。揺らぎはしてもばったりと倒れずにすみましたのは、他ならぬこのあつしの働きがあったからだと申しましても、まるつきり嘘ではないのでございます。おまえごときが何をしたんだと、きつと信用なさいませんでしょう。昔むかしのことはどうせ誰も知らないのだから、それをよいことに大法螺を吹いているだけと思われましても、それならそれで仕方のないことです。つまらぬ自慢話でございます。

あのとき、あつしはここから北に離れたところで、国のはずれの寨さいを守る兵隊でありました。我が国も警戒はしていましたが、まさか本当に攻めてくるこ

とはあるまいとたかをくくっていたところがあつたのでしよう、備えが万全でないところに敵は狙いをつけて攻めてきまして、国境を守るいくつかの寨があつという間に落されてしまいました。思いもよらぬ勢いで敵はやってきまして、もしもあつしのいた寨も落されてしまったならば、そこからはもう後がなくて、敵がどつと国内に攻めこんできてしまうという、実にせっぱつまつた事態になつてしまいました。

どうやってあつしが寨を守り通したのか、そういう手柄話を、つい調子にのつてこちらの旦那様にひとくさり語ってしまったところなんです。それほど働きをしたのが本当なら、どうしてこんなところで、しがない仕事にしがみついて、わびしい暮らしをしているのかと、きつと不審に思われるではありません。あつしも不思議に思います。しかし、実際のところ世間というものはこういうことに

なっているのをごいいます。あつしがいなかったならば、この国はいまこのようではいられなかったのです。なのに、あつしの働きなど、いまではどこにもなかったかのようなことになってしまっています。都におられるお歴々の方々は、あつしなんぞには洩もひっかけてくれません。世の中とはそういうものなんだと、あつしは骨身にしみて知らされたのをごいいますよ」

郭綸はそのようなことを言ってから、戦場での働きを語りました。その話にと弟は強い印象を受け、2人は旅に出て最初の詩を詠みました。弟の詩は郭綸の話を丁寧になぞるようにして詠んだもので、私はその部分は弟に譲って次のような詩を作りました。

老いた郭綸が勇猛な戦士であったのを知る人は、

いまこの町にはいない。

しがな役人としてあくせく働いても貧乏であるから、

この町の人は、

郭綸の乗る馬がひどく痩せ細っているのをいつも見ている。

仮のやどりのぼろ小屋に、

巨大な鉄の槊さくが置かれているのを見た者はいない。

郭綸は言う。

「あの槊を振りまわして、

わしは三日間の猛攻に耐え抜いた。

それで敵は引き揚げたのだ。

だが亡び去ったわけではない。

だから、わしはずっと一つのことを願っている。

いつか必ず一万の騎兵の先頭に立って、

今度は敵地へと攻め入るのだ」

私は言う。

「そのときがきたならば、

私も戦場に出て、

あなた方の放つ矢が敵陣に雨のように注がれるありさまを、

必ず見させてもらおうと約束をしよう」

郭綸は熱を込めてこう言いました。

「このあつしを老いたとは誰にも言わせはしない。こんなところの埋もれ木にさ

せてしまったのは間違っていたと、皆に言わせたい。都のお歴々の方々にひと泡ふかせてやらねば死んでも死にきれない」

郭綸を詠んだこの詩が、その後、後世に残されたものとしては私の最も古い詩となりました。それ以前の詩は全て失われてしまいました。この詩が残ったのは、何か理由があったのでしょうか。この詩の出来がよかったからではありますまい。恐らくは、郭綸の思いが、この詩を生きながらえさせたのでしょう。

——あのですね、郭綸が言った通りの手柄を挙げたのが本当なら、どうしてそのことが世の中に知られなかったの？ 戦場での功績で大きければ、將軍に出世するとか、どうしてできなかつたの？



㊦

郭綸が優遇されなかったのには二つの要因があったのでしよう。第一に、宋という国では、いわゆるシベリアン・コントロールが極めて厳密に行われていたことが挙げられます。武官は必ず文官の下に置かれ、相対的にかなり軽く扱われていました。軍人が幅をきかせて、天下が四分五裂してしまった前代の歴史の反省の上に立って、そのようなことになったのでした。だから、どれほど軍事的に成功をおさめた將軍でも、朝廷での出世はあまり望めませんでした。武官の失敗は厳しく罰せられる一方で、成功してもさほど高くは評価されませんでした。

もう一つの理由としては、郭綸が戦った時期に国境の防御に責任があった文官はことごとく譴責処分を食らい、郭綸らの功績を朝廷に伝える者がいなくなってしまうたということがあります。朝廷内の大きな勢力交替とも連動していたために、郭綸らを顧みる人がその後はいなかったのです。

——シビリアン・コントロールは大切だと思うけど、末端で苦勞した人が報われないというのもよくないんだろうなあ。

㊦ 急に話は飛ぶようですけれど、ジョン・クレアの詩にこういうのがなかったでしょうか。

自由という言葉は、正義の名において  
他の者を虐待する奴隷化の道具をあらわす欺瞞の言葉となっている。

（鈴木蓮一訳『ジョン・クレア詩集』（英宝社、2004年）、183ページ）

——ん？ どうかなあ。あつたかも知れない。えーと、ちよつと難しい言い回しをしているけど、たぶん、それは「囲い込み」に対する痛烈な叫びなのかも。

㊦ そうです。イギリスでは大規模な「囲い込み」が2回あり、農民が自由に入りできていた入会地いりあいちが柵で囲まれて、特定の人間の所有物となつてしまいました。入会地の私有化は、実は自由と正義の理念を掲げて合法的に行われたのです。昨日まで毎日歩いていた小路が塞がれ、何百年も大地に根を張っていた榆が切り倒され、貧しい農民が生活の場を失いました。阻害された側の一人であったジョン・クレアは自由も正義も欺瞞だと叫んだのです。

——いまなら、いわゆるグローバリゼーションをきつと欺瞞だと叫ぶと思うよ。

① 私の時代なら、郭綸を阻害した社会の仕組みを欺瞞だと叫んだことでしょう。

私は郭綸の不運に同情し、郭綸が再び戦場に立つときには断固エールを送ると詩に詠んだわけですが、ジョン・クレアの詩を前にすれば大いに恥じねばなりません。私の詩が滅びたなら、郭綸の思いは後世に伝わらなかつたでしょう。それは正しいとしても、24歳の私に郭綸の心がどれほどわかつていたのでしょうか。私ははなはだしく思い上がっていたのではないのでしょうか。

ああ、ここまで話してきて、先へ進むのが難しくなりました。気持ちがかかなり混乱して来ました。私はジョン・クレアの側ではなく、「困い込み」をする側にはたのではないのでしょうか。私の詩は欺瞞の産物だったのでないのでしょうか。

申し訳ないのですが、この先はまた次の機会にということにしてはいただけないでしょうか。いえ、ここまで聞いて、もう興味がありませんということでしたら、それはそれで構いません。「遊たびの奇絶きぜつ」などはこれで終わりにして、以前と同じように楽しく呑むようにすればいいだけですから。

——そうなの？ ボクとしては、トバー君のなんか苦しそうなまの顔を見て、話すのが辛ければもう終わりにしてくれてもいいんだけど、もつと聞いてみたい気がしている。

Ⓣ では、失礼させていただきます。

\* \* \*

あたふたとした様子でトバー君なる人物が立ち去る音が、店の喧騒を背景に小さく消えて行くところで録音は終わった。

これを聞いてまず思ったのは、トバー君なる人物は実在するらしいということ。イノ君がシナリオを書いて誰かにトバー君を演じさせたということはまずないだろう。とすると、トバー君とは何者なのか。

蘇東坡についてかなりの知識があるのは間違いない。ICレコーダーのスイッチを押されていきなりこれだけ語れるのは普通ではない。トバー君が日本語で語った二つの詩のうち、後の二つの原詩を探してみた。簡便な詩集では見つからず、滅多に開いたことのない全集にそれらしいものがあつた。原文と日本語がほぼ対応しているところもあれば、かなり異なるところもあつた。例えば、旅人を

招き寄せて酒を呑み始めたと言っていた部分に相当するのは、

苦寒有酒不能飲（くかんさけあのあた）  
（苦寒酒有るも飲む能わず）

であるらしく、たった7文字だった。これはいわゆる「超訳」というようなものであるのだろうか。有名でない詩に加えて、父親の詩文までもその場ですら「超訳」できるのは、よっぽど蘇東坡に入れこんでいるのか、蘇東坡その人でなければならぬだろう。もちろん、後者であると考えることはできないのだが。

特に不可解なのはトバー君がジョン・クレアに言及したことだ。蘇東坡とジョン・クレアは何ら関係性はない。何らかの目的でイノ君をだまそうと、親密度を高めるためにジョン・クレアを持ち出したということならありうるだろう。し

かし、蘇東坡を演じつつジョン・クレアを持ち出すのはあまりにも不自然だ。

さらに、寅さん風の声にまず驚かされ、その本人が「フーテンのトーバー」と名乗ったのには呆れ果てた。不自然さもここまでくると、トーバー君が話していることすべてがいかさまどしか思えなくなるのだが、語る内容はどれも不思議と真実味を帯びている。とりわけ姉の死について語ったところは感動的ですからある。しかも、それは我が伯母に似ていなくもない。私の伯母、つまり父の姉は、私が生まれる10年以上も前、戦時中に死んだ。父が軍隊で下士官になるための訓練を受けている最中に伯母は結婚し、間もなく不可解な死を遂げた。伯母は結婚したにもかかわらず、嫁ぎ先ではなく、生家の墓に旧姓で葬られた。父は姉の死を受け入れられず、いけなる事情があったのか一切聞くことを拒否した。その経緯は私のチャチなホームページの中に置いた『書きかけの自伝』で父自身が語って



いる。

そのようなこともあって、不可解な点は多々あるにしてもトーバー君の語りは私の興味をひいた。少なくとも、私がかつて挫折した小説よりはトーバー君の語りの方がおもしろいのは、いささか悔しいけれども認めざるをえない。

であるからには、せつかくイノ君が録音してきてくれたのだし、「我が生涯」を所望したのはそもそも私であるのだから、ホームページに載せるべきだろうと、私は判断した。とはいえ、2人の会話を文字に置き替えるのはそれほど容易ではないとすぐに予想がついた。おカネがあれば、音声データを文字化する「はんやく反訳」という作業を専門業者に頼むのだが、イノ君同様に家計に余裕のない状況では自分でするかない。イノ君がもしも次々に録音してくるようだと大変なことになってしまう。

とりあえず面倒なことは後回しにして、イノ君に頼まれたジョン・クレアの詩集を検索して注文するとうごく簡単なことだけはその日のうちにすませた。ついでながら、私の本箱にあつた英詩の本とは松浦暢編訳『英詩を愉しむ』（平凡社、1997）で、漢詩ばかりを読んでいたのでは世界が狭くなってしまうと、一時期、日本語の詩に加えて英詩もちよつとだけかじつてみたときに購入したのだった。